

【書評】

加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏編著『多文化社会の偏見・差別  
－形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店 2012年

中崎 温子

Atsuko Nakazaki

本書は、異文化間教育学会第32回大会シンポジウムの、①偏見はどのように形成されるのか、②偏見・差別はどのようにその人を苦悩させるのか、③偏見低減のためにどのような可能性があり、どのような効果的な教育実践があるか、④社会心理学の理論から研究と実践を交差させ偏見低減の可能性をどのように考えていくか、という課題をベースに、これまで蓄積されてきた先行理論に基づいて諸事例を分析し考察する。後半では、学部生や院生の偏見低減の学びやヒューマンライブラリーの取り組み等をわかりやすく伝える。

1981年の設立以来、よく知られているように、異文化間教育学会は、グローバル時代を背景とした「異文化間教育・異文化間コミュニケーション」の課題、「異文化理解や異文化接触」「多文化共生」に関する問題等々を先見的に論じ多くの有効な知見を提供してきた。だが、今回の大会シンポジウムと本書のように、「誰一人切り捨てられない」社会をテーマに、多様な背景を持つマイノリティの日常や苦悩に真正面から分け入り対峙した研究と実践は、関連フィールドでは、ある意味衝撃的であり、新たな視点の広がり喚起するものであるといえる。

（第1部）「多文化社会における偏見形成」

第1章「グローバル社会における多様性と偏見」は、日本社会が多文化化してきている現状で、地域社会、大学・学校コミュニティでは、文化的背景の異なる多様な価値観、日本語のできない人々や子どもたちの多様性をどのように受容できるのか、また、住民として共に生き、日本に居住する子どもたちとして長期的に育てていけるのかという問いかけから始まる。データは、地域社会に外国人が増加す

ることに對し肯定的ではない現実を示し、日本への同化要請と排除の問題は、外国人児童生徒たちの生きにくさ、アイデンティティの育ちにくさに繋がっていくとする。ここでのキー・概念は「カテゴリー化」「集団間コンフリクト」ということであり、カテゴリーの外集団に対する偏見の形成の問題がクローズアップされている。第2章では、幼児独特の「前偏見」の生成の問題が、理論的枠組みや関係図、事例を通して具体的に示されている。第3章では、「ユニークフェイス：病気や怪我などが原因で『普通』とは異なる見た目を持つ人たちの総称」の当事者の立場からの体験と、様々な異文化体験と同時に家族に障害をもつ一人の女性の周囲に対する関係性の変化の、二つのライフストーリーが語られている。

1, 2章ともに、現状分析だけではなく「偏見の低減」の可能性にも向き合おうとしており、1章では、偏見や差別に對し回避することなく現状を直視し自覚化・意識化していくことの積極的態度的重要性を説く。そして、そのことが「接触仮説」に関する諸理論や実践を通しての肯定的な態度形成に至ることの事例を挙げる。第2章でも、「気づき」を通じた前偏見の低減が提示されており、「保護者の援助の可能性」にも言及している。

（第2部）「偏見低減の理論と方法」

第2部を構成するのは、「偏見低減のための理論」と様々な方法論、内外の実践活動例である。第4章では、偏見を形成するキー・概念の「(ウチとソト集団の)カテゴリー化」の心理的過程が、低減を考える上でも必要なキーとなっていることを述べる。第1部でも提出された「接触仮説」を効果的に取り

入れた試み、そのためには、4つの条件、即ち、①対等な地位、②共通する目標、③集団間接触に対する社会的および制度的支持、④親密な接触（十分な頻度と期間）、を満たすことが望ましく、それによって、偏見を是正することが予測されるとしている。さらに、「カテゴリー化」の段階モデルの実践、近年注目されている間接的接触モデルの効果に関する研究等、研究領域を広げ実践への足がかりとしている。

第5章では、「偏見と差別」をトピックとする教育実習授業2コマ分について取り上げている。お茶の水女子大学の「多文化間交流論」（日本人学生20名と留学生13名の交流授業）科目での教育実習である。院生が担当する授業に、学部を受講生がどのような学びを得たか、さらには、1回目と2回目ではどのように学びが変化したかについて分析している。同時に、4名の実習生が実習を振り返ってどうであったかを整理している。実習授業の流れは、「カテゴリー化」「ステレオタイプ」「偏見」についての理解のための講義からスタートする。その後、グループワークを通して学生が社会に存在する偏見、その原因について話し合い、偏見低減へと発展させることを目指している。

受講生の学びに関しては、20ページもの紙面を割いて報告と分析を起こしている。受講生は、段階を追って、差別に至るまでのメカニズムの獲得、差別に関する社会と自己との関連性の認識、認識の再構築（差別を完全に解消することは困難であると認めつつも個人の努力によって減らすことは可能であるとの気づき）、さらには、対策意識へと学びを進めて行く様子、その過程で、学びの変容において3つのタイプ群に分かれたことをまとめとしている。また、2コマの授業を担当した実習生にも多様な学びをもたらしたことも報告されている。

6章、7章、8章は、ヒューマンライブラリーの実践的取り組みの手引きとその誘いである。2000年にデンマークで始まったHuman Library（旧称Living Library）は、2008年6月の朝日新聞で紹介され、「生きている図書館～私たちを借りてみませんか？～」は、多くの人々にインパクトを与えた。本学組合の『別冊ひろば』にもそれを報じる者がい

た。駒澤大学での実践活動の中で、「本」探しの苦闘、「本」出演者との交渉と保護の難しさ、「図書館の本を傷つけてはいけない」ための手続きを厳格に一般読者に守らせながら運営していくことの大変さ等が克明に描かれ、読む者を打つ。この取り組みは、社会的責任とリスクを伴う活動であるため、明確な教育観と使命を持って実施しなければならないことはいうまでもない。8章では、ヒューマンライブラリーの先進国オーストラリアの取り組みが書かれている。オーストラリアではヒューマンライブラリーを「共に地域を創るための国家戦略」として位置づけ「対話に次ぐ対話で地域をつなぐ」ことを標榜する。地域の市立図書館を拠点とするいくつものヒューマンライブラリーがありその実践もピークを迎えているようである。

本書の最後に、地域住民が互いに働きかけ力を発揮しあう土壌が、多様性に道を拓いてきたことがまとめられている。

- ・何かを達成したいと願う創始者の情熱
- ・プロジェクトの拡大や制度化に向けた行政への働きかけ
- ・中心人物を核とした実施目的に沿った組織的な運営
- ・評価と改善のサイクル
- ・地域の内外でそれぞれの人がもつ資源の共有
- ・多様なニーズをもった人々の目的の共有化

全編の随所に、地域活動に資する示唆が散りばめられており、是非読んでいただきたい書である。

受稿：2013年5月20日

受理：2013年6月13日